非母語話者による日本語長短音素対立の知覚と学習
—英語話者と韓国語話者の比較—

Non-native perception and learning of phonemic length contrasts in Japanese:
A comparison between English and Korean speakers

加藤 宏明（NICT/ATR)、鮮于 媚（早稲田大学)、田嶋 圭一（法政大学)、
山田 玲子（ATR Learning Technology)、匂坂 芳典（早稲田大学)

促音と非促音のような日本語の長短音素対立の聞き分けは，非母語話者にとって困難であることが多い。本発表では，非母語話者が母語話者と同じ知覚手がかりを学習によって獲得することができるか，そのためにはどのような学習方法が有効か，それは学習者の母語に依存するか，を知るために実施した一連の実験的検討について報告する。この検討の主目的は，効果的な日本語音声学習方法の開発であったが，同時に日本語音声の特徴の本質的な理解にも寄与し得ると考える。仮に，非母語話者がどうしても獲得できない知覚的特性があったとすると，それは日本語を他の言語から際立たせる代表的な特徴の一つを反映していると言えるだろう。

発表の前半では，非母語話者が学習すべき母語話者の知覚手がかりについて述べる。「母語話者と同じ」が理想ではあるが，あらゆる面でそっくり同じ，を目指すのは現実的ではない。そこで，日本語の音の並びやアクセント規則あるいは発話器官の制約により付随的，副次的に生じる手がかりではなく，より本質的な手がかりを優先的に対象とすることが望ましい。長音素の知覚に共通するのは，特殊拍と呼ばれる部分（促音，長母音の後半部，撥音*1）に拍が存在することを明示する音響的手がかりが存在せず，対立する短音素との判別を主として時間的情報のみに頼ることである。母語話者が時間的情報を利用するしくみは，すべてが詳らかになっているわけではないが，抽象化された拍感覚が基準であること，その基準は発話速度に応じて可変的であること，の２点は疑いないと思われる。これら２点の獲得を目指す。

発表の後半では，集中的な訓練によって，非母語話者がどのような手がかりを獲得するかを，英語話者と韓国語話者を採りあげて検討する。第１段階として，英語話者の訓練には，長短母音の対立を，韓国語話者の訓練には，促音・非促音の対立を使った。各々の母語に長短母音あるいは促音・非促音に類似した時間構造を示す音素対立を持つため，学習が比較的容易であろうと予想したからである。学習効果の検証のため，長短母音および促音・非促音の両方の対立を含み，３段階の速度で発話された日本語単語の聞き取りテストを訓練前後で実施した。その結果，英語，韓国語いずれの話者群においても，訓練に使ったものと異なるタイプの音素対立への訓練効果の般化，発話速度の違いに起因する誤答の減少，の傾向が見られた。これは，拍感覚の抽象化と発話速度への適応が，ある程度は達成可能であることを示唆する。訓練効果の頑健性を調べるため，第２段階として，韓国語話者の訓練に長短母音の対立を使った実験を現在実施中である。速報結果に基づき，英語，韓国語話者による日本語長短音素手がかりの獲得可能性を考察する。

*1 撥音・非撥音の対立は，後続音節の頭子音が鼻音である場合（例：「コマ」対「コンマ」，「可能」対「官能」）を対象とする。